

「中心市街地」はどこのことか？
このことについては、市民ワークショップや基本計画協議会等で「広く、大きく」あるいは「絞り込んで、コンパクトに」など、様々な議論がありました。その結果、市民が「まち」として認識しうる場所ということと、法律での3つの要件を考慮して、おおむね「JR留萌駅～信金本店」「留萌生協～留萌郵便局」「労金留萌支店～港栄橋」を結ん

だ内側の区域（下図参照）、約51haを留萌市の「中心市街地の区域」としました。中心市街地活性化の目的は、商業、たけの活性化策ではありませんが、その最も重要な要素である商業地区を中心として、効果的かつ集中的に民間事業や基盤整備などの展開が期待できる可能性を、区域設定の視点としました。



中心市街地位置及び区域の三つの要件

▼中心市街地の位置及び区域については、法律により次のような三つの要件が規定されています。

- ①相当数の小売業者が集まり、また様々な都市機能が集まり、その市町村の中心としての役割を果たしていること。
- ②土地の利用状況や商業活動の状況などからみて、機能的な都市活動の確保又は経済活力の維持に支障を生じ、又は生じる恐れがあること。
- ③その区域の活性化を推進することが、市町村やその周辺地域の発展にとって有効・適切であること。



INTERVIEW

わたしは、こうしたい！
—中心市街地活性化—

今年はまさに転換点

今回の計画づくりでは、いろいろな人の話が聞けて、わたし自身、とても勉強になりました。

今、留萌の商店街は地盤沈下を起しています。例えば、空き店舗発生率は、全道で7番目。若手の経営者も少ない。郊外の大店との競争。高齢化、少子化が進むという留萌の現状がある。一方で、車社会、不況という社会的な要因もあって個々の商店にはとても厳しい時代です。商店街相互の競争力も衰えて、危機感を感じています。この計画ができて、今年はまさに転換点。商業者内部でも、計画を進めるにあたって、何ができるのか協議しています。

コンパクトなまちを作る

過去10年で商店数が減り、空き店舗は空き地になり、駐車場になりました。今後も人口は減ることはあっても、増えることはないでしょう。だからこそ、コンパクトなまちづくりが必要です。核になる集積施設も、ひとつこけるとゴースト化というリスクがあります。道路、駐車場、景観などインフラ整備は確かに必要ですが、肝心なのはむしろ心の問題。商業者の心の変革が必要です。

やる気のある人が集まって、中心市街地を盛り返したい。個々の商店には店の歴史、業種、立地などいろいろな違いがあつて、なんでも一緒に考えられませんか。でも、共通項を見出して、

まちはみんなのもの

子供たちにまちを残すのは我々の使命だと思っています。

「住んでよかった」と思えるような、ほんわかと温かいまち。きれいでなくてもいいから、「ふるさとなんだ」と、帰ってきたくなるようなまち。

例えば、大型店を総合病院とすると、個々のお店は個人病院。今は、車で大型店を利用する人が多いのは確かです。でも、いずれ個々の店の役割が必要になってくると信じています。かかりつけの町医者や、家族全部のことを知っているように、小さな店にしかできないよさを発揮すれば、お客さんは必ず戻ってくるはずです。

空き店舗を利用して、子供に、本当の「買い物」をさせてもいい。

「商店街は楽しい」「まちに来ると楽しい」という環境を作りたい。

計画を進めるということは、商店街が試されると言うこと。

無理せず、背伸びせず、知恵を出して、積み重ねていきたいと思っています。

この計画はそのきっかけです。

「まちはみんなのもの」という意識を、商業者も消費者も共有して、まちを再生していきたいですね。



関口 秀二さん

(せきぐち・しゅうじ)バード経営／中心市街地の商業者として、留萌市中心市街地活性化市民ワークショップに参加。三番街商店街振興組合副理事長・留萌商工会議所活性化対策特別委員会委員。

ラストチャンス

—留萌びとと中心市街地—